ISSN 1884-7803

ナチュラル・スピードの英語聴解力の習得に向けて(2)

―英文法の有意味的学習―

キーワード:ナチュラル・スピード／ハンディキャップ軽減プロセス／言語体系構築／
英文法の有意味的学習／文法的メタファー／圧縮表現／主体化

山 本 幸 一

0. はじめに

本稿では、ナチュラル・スピードの英語聴解力習得に向け、その習得プロセスの「足場」である文法学習(2節の表1を参照)に焦点を当て、高校までの学習英文法知識の精緻化についてみてみる。「リスニング習得なのに文法？」という考えは「群盲象を評す」の如く的外れである。問題解決において、近視眼的視点では解決には至らない。俯瞰的視点から、要素と要素が相互関係にあるシステムとして問題の全体像を捉えて解決策を洗い出す必要がある。「文法かコミュニケーションか」、「文法などやらず、とにかく、英語で話す訓練をすべきだ」というような要素還元主義では解決には至らない。文法もコミュニケーションも含めた全体像を捉えることが必要なのは言うまでもない。例えば、「英語で話すことが苦手」という問題についても、英文法・作文力はどうか、英文読解力はどうか、日本語での意見表出・議論の技能はどうか等々、問題の近くではなく、遠いところに本質的な解決策のある可能性もある。学生の英語のスピーチ原稿や、レポート、論考を添削するにあたって、英語を直すだけでは埒が空かないということは大学の教壇に立った者ならば経験することであろう。何を言いたいのか、どのように納得できるように意見をまとめるのか、という点について、英語の前に、母語である日本語での熟考がなされていない。そこで、英語の添削以前に、内容、論の進め方について、学生と相談しながら、最初から書き直しをさせる必要のある場合もある。コミュニケーションについては、日本人にありがちな「羅列型コミュニケーション」では答えが永遠に得られないのだから、欧米型の「問答型コミュニケーション」の方が効果的であり、意見の構築については、日本語の「起承転結」形式より、欧米型の「序論・本論・結論」という「エッセイ」形式の方が根拠と結論が整理されて明確に示されるので効果的である。

「英語指導者」の活動は、「英語学習者」としての経験に基づいて行われることは避けられない。ただし、自身の経験をそのまま指導に活用するのではなく、継承すべき点と改善すべき点を点検する必要がある。学校での授業が文法訳読式の最盛期であった筆者の経験では、この方法の長所を継承し、短所である不足部分を付け加える必要がある。長所とは、文法読解による効率的な明示的学習である、短所とは、英語、特に音声に触れる量の不足である。本稿では、「文法的メタファー」

ISSN 1884-7803

について、「有意味的学習」の観点から、英語学習への生かし方をみてみる。「有意味的学習」を、「機械的記憶ではなく、文構造とことばの動機づけを明確にしてことばのしくみに注意を払いながら、学習者の腑に落ちる形で学習を進めること」という意味で本稿では使用する。「文法的メタファー」である名詞表現や無生物主語構文は高校では周辺的事項として学ぶが、名詞表現を中心とする圧縮表現は、日本人学習者にとっては、習得上の難所の1つである。安井(2012)の解説から参考となる点を取り出して学習上の指針としたい。

1. ナチュラル・スピードの英語聴解力の習得

歴史をみると、合理的思考ではなく希望的観測に頼り失敗する例が散見される。太平洋戦争のターニングポイントとなるミッドウェー海戦の惨敗が象徴している。半藤・江坂(2006)を参考にすれば、敗因は、日露戦争の辛勝を大勝利と勘違いした奢りが根底にあり、遠因として、真珠湾攻撃での攻撃の甘さから石油タンクや修理工場を残存させてしまったこと。近因は、情報、暗号解読の重要性の理解不足のため、珊瑚礁海戦の二番煎じの作戦が米軍に読まれていたことである。また、作戦直前の人事異動、司令部と現場指揮官との意思疎通不足から生起する航空機を中心とした機動部隊が主力となることの軍全体としての認識不足、ミッドウェー島攻略と米機動部隊壊滅の二兎を追う作戦目的の曖昧さ、索敵や航空機の兵装転換等戦術上の失敗が挙げられる。いずれも合理的思考とはかけ離れた動きである。英語学習についても成果が上がらない背景には合理的思考がなされていない点が見受けられる。

合理的な思考力・判断力をもつとはどういうことであろうか。1つには、事象を見て、見えない構造、つまり、事象を構成する要素同士の有機的な関係性を捉えることと言うことができる。英語学習の構造を捉えない粗雑な思考力・判断力の故、非合理的な学習法が巷に喧伝される面がある。例えば、次のような意見が聞かれる。「文法・読解を学んでいるからいつまでたっても英語が使えるようにならない。文法・読解をやめて英語だけでのやりとりを行うべきだ」という前提条件取り違え、「映画や海外ドラマの英語は難し過ぎるので、英語の教材としては向かない」という目標取り違え。これらは、山本(2022)及び本稿で詳述しているテーマに関係しているが、見当違いな点をまとめれば次のようである。思考・概念の保存されているのが「陳述的記憶」で、身体運動の保存されているのが「非陳述的記憶」である。英語学習で言えば、前者は英語の知識、後者は英語の運用能力が関係している。文法・読解を学んだ上で英語に多く触れる努力をしないで、文法知識が知識のままで活用できない、つまり、文法知識が「陳述的記憶」に止まり、「非陳述的記憶」に保存されないことが、本来力を入れるべき文法・読解の否定論に結びついている。学習方法の点検・精査に向かい、英語学習不成果の原因を探すのではなく、文法学習に責任の転嫁をしている。また、ナチュラル・スピードの英語ではなく、スロー・スピードのカタコト英語を学習目標にして「非陳述的記憶」にいくら保存していても、カタコト英語は聴き取れても、英語圏の日常会話、映画や TV ドラマを聴き取れるようにはならない。問題の解決を探らず、短絡的思考に陥っているこのような見当違いな考えの帰

ISSN 1884-7803

結は、次の感想によく表れている。

> 日本語と縁の薄い英語をネイティブの知識人並みに読むというのは、…日本語を母語にしている皆さんは、日本語でなら常にしていることです。しかしそれと同じことを英語でしようというのは、極めて野心的な冒険です。…大きな努力、忍耐力が必要です。英検1級の英語力によほど多くを加え、よほど頑張らない限り実現は望めません。 （行方, 2018）

> 英検1級を持っている生徒さんと話してみても、みなさんリスニングには苦手意識を持っていることが多く、映画、ドラマ、ニュースなどをストレスなく理解できる、ネイティブ同士の会話も問題なく聞くことができる、といったレベルにはまだまだ遠い方がほとんどでした。…多くの人が期待している「英検1級合格者のリスニング力」と「実際の合格者のリスニング力」では大きな隔たりがあるのかと思います。 https://learnermtk.jimdofree.com/2022/01/06

2. 学習と獲得の2層構造

スティーブン・クラッシェン（Stephen Krashen）が、Krashen（1982）で主張しているのは、言語習得に関して、「獲得（acquisition）」と「学習（learning）」という異なる方法があるということである。「獲得」とは母語話者が母語を習得する潜在意識のプロセスである。学習者は、文法規則を習得しているという意識はなく、自然と習得し話せるようになる。他方、「学習」は意識的に行われるものであり、従来の学校教育で行われているように、文法の規則等について、説明と理解を通して学ぶことを指している。前者は、体育や音楽等の実技教科の学びに近く、後者は、国語、理科、数学等の座学教科の学びである。母語習得は、「獲得」で可能だが、外国語習得は、脳の発達と言語環境のハンディキャップのため、「獲得」だけでは不十分で、「学習」の補完が必要である。

母語習得と外国語習得における違いを、植物の生育の比喩を使って表現すれば、母語習得は、「地に落ちた種子が、野生の自然の中で水分、栄養を得て育つこと」に例えられる。対して、外国語習得は、脳の発達段階（脳の可塑性のある臨界期を過ぎている）と言語環境に恵まれない（英語が終日聴けて対話のできる環境ではない）というハンディキャップのため、「球根を植えて、水と肥料を与えて育てること」という意識的な世話が必要なことに例えられる。「球根」は、「文法・読解の学習」、「水と肥料」は「英語の多量インプット」の例えである。明示的学習を通して基盤を作り、暗示的学習、つまり英語にたくさん触れることにより英語が習得されていく。この2つのプロセスが、外国語習得には必要であると考えられる。

「学習」と「獲得」について更にみてみよう。「学習」の意義は何か。本稿では、それは、母語習得と比べて、脳の発達からも言語環境からもハンディキャップがある外国語習得において、「ハンディキャップ軽減プロセス」であると捉える。このプロセスは2つから成る。1つ目は、「母語フィルター」に関係する。白井（2012）によれば、母語を一度身につけてしまうと、「母語フィルター」という、濾過装置の

ISSN 1884-7803

ようなメカニズムを通してしか、音声面・文法面について、言語処理ができなくなる。これは、母語処理に必要のないことは無視して、効率よく言語処理をするメカニズムであり、母語にとっては有利に働くが、外国語習得においては不利に働く。例をみると、1歳くらいまでの赤ん坊は、r と l の違いは疎か、世界中の言語のあらゆる音声を区別できるが、母語を習得するうちに、周りで話されている母語以外の音を聞き分けることが困難になる。 しかし、音声面・文法面について、明示的学習を通して説明による理解により母語にない言語処理を可能にすることができる。これを、「母語フィルター透過装置」と呼ぶことにする。2つ目は、母語環境と違って習得にかけられる時間に制約があるため、抽象的な規則を、時間をかけて帰納的に抽出する暗示的学習だけに任せられなく、演繹的に説明を通して学習をすることにより、「時間短縮装置」とすることである。臨界期を過ぎた学習者は、既に日本語を習得しており、論理的思考力が発達してくることもあり、日本語での説明を取り入れた方が、効果的習得が可能となる。このようにした「学習」の成果は、多量インプットのための「足場」となる。以上のプロセスをまとめると、**表1**で示すことができる。

学習「ハンディキャップ軽減プロセス（母語フィルター透過装置／時間短縮装置）」

1	明示的学習	語彙、文法・読解、英語音声学基礎	時間をかけての理解

獲得（多量に英語に触れての「言語体系（言語理解・産出機構）の構築」）

2	暗示的学習	直読直解	速いスピードでの理解
3	暗示的学習	直聴直解	速いスピードでの理解

表1

為末・今井（2023）に述べられているように、世界は多層的で連続的であるが、言葉はその中から一層だけを切り取り、それを連続量ではなく、非連続的で断続的な離散量としてカテゴライズ（区分）している。連続量である世界に対し、非連続的な離散量として捉えられる言葉による概念世界。この知見から考えると、明示的学習は、言葉によってなされる意識的学びであり、断続的な離散量の積み重ねであり、学びの成果を認識可能である。他方、運動能力や技能を中心とする暗示的学習は潜在的学びであり、言葉によってなされるわけではなく、つまり、離散的ではなく、細かな連続量の積み重ねと言うことができる。意識がそこまで細かい点に及ばないため、学びの成果は離散的に認識されると考えられる。従って、ある時、できること・上達に気づく、つまり、「突然読める、聴こえる」感覚が起きる「瞬間的気づき」が段階的にやってくることになる。明示的学習と暗示的学習の2層構造を捉えないと、次のような文に接して誤解が生じると言える。

Second Language Acquisition（SLA）の研究では、言語学習が、言語の型を一つ一つ積み重ねて大きな塔を完成させるというようになされるという研究結果は、どこにも見られない。（和泉，2007）

英語の獲得プロセスしか見ずに、子供たちが教科として英語を学習する面を看過すれば、「木

を見て森を見ず」である。また、暗示的学習の足場が一通りできた段階で、明示的学習が不要になるわけではないことも、積み重ねの学習が必要なことを示している。日本語母語話者についても、潜在的学習によって母語である日本語を身につけた後も、学校教育や自学で、辞書や参考文献等を使用して明示的学習を進めている。社会人としては、話し言葉だけで済ませられず、明確で精確な表現方法、論理的な文章の作成の仕方を身につけるため、明示的学習は日々必要である。外国語としての英語学習においても、辞書や文法書等を使用して明示的学習を進め、学んだ学習英文法の知識を精緻化する必要がある。次節以降、高校までに習った学習英文法知識の精緻化についてみることにする。主に、「圧縮表現」について、英語学習への生かし方をみてみる。学習英文法では、中心的項目としては扱われて来なかった「圧縮表現」であるが、「潜在的メッセージ」を読み取り、「ほどく作業（安井・安井, 2022）」が必要となる。

3. 英文法の有意味的学習

3.1 文法的メタファー

安井(2008)(2012)を参考に、文法的メタファーを、学生の文法の「有意味的学習(meaningful learning)」に役立ててみよう。歴史的背景、使用意義、そして「ほどく作業」が有用である。Grammatical Metaphor（文法的メタファー）は、Halliday（1985）が用いた用語である。典型的な「文法的メタファー」のパタンを He arrived early.という文でみてみると、この主語・述語表現が、名詞表現となり、his early arrival となるが、「主語＋述語」が、「所有格代名詞＋名詞」にみたてて表現されており、この名詞表現が文法的メタファーである。

メタファーとは、A という概念で B という概念をみたてることである。A と B には共通点が存在する。「人生は旅だ」という表現では、「旅」で「人生」をみたてており、「旅」は、通常の意味から拡張した意味に変容している。両者には、始めと終わりがあり、過程にはいろいろな出来事がある、という共通点が見つかる。「旅」と「人生」との共通点から、「旅」という語が拡張した意味として使用されている。メタファーでは、ある概念、表現が別の意味として転用されるが、「文法的メタファー」とは、通常 B という文法形式で表される概念を A という文法形式によってみたて、A という文法形式が通常の使われ方ではない形で使われるため、この A の文法形式のことをこう呼ぶのである。文法的メタファーでは、名詞化が大きな働きをするが、名詞表現が主語となって現出する無生物主語構文も文法的メタファーである。認知的把握における直接的な文法形式「主語＋動詞」で表される (1) が、(2) のように名詞化される。

(1) He arrived early.
(2) his early arrival

両者には、「主体（主語／所有格名詞）」と「属性（述語動詞／名詞）」という共通点がみられる。英

ISSN 1884-7803

語の特徴である無生物主語構文も、文法的メタファーである。認知的把握における直接的な概念化である (3) が、(4) のような間接的な概念化による構文に書き換えられる。

(3) If you take part in this tour, you will have a good chance to make friends.
(4) This tour will give you a good chance to make friends.

「従属節(原因)＋人主語の主節」からなる (3) の文が、(4) では、通常、人を主語とする「人 give 人モノ」という第4文型の文にみたてて表現されている。両者には、「原因(原因となるできごと／与える人)」と「結果(生じる結果／与えられる結果)」という共通点がみられる。

his early arrival を例として、文法的メタファーと通常の表現 He arrived early を対比して、それぞれの特徴を示してみると、**表2**のようにまとめられる。

	通常の表現	文法的メタファー
表現方法	認知的把握の直接的表現	認知的把握の間接的表現
主語	名詞	名詞の所有格
述語	動詞	名詞
様態	副詞	形容詞
	子供の言葉遣い	大人の言葉遣い
	口語的	文章語的

表2

3.2 整合形と圧縮形

安井(2008)(2012)は、Halliday の文法的メタファー論に基づいて、英語の表現は、整合形(congruent form)と圧縮形(compressed form)である文法的メタファー(grammatical metaphor)の2つに分かれるとしている。前者は、見たまま、聞いたまま、感じたままを素直に言語化したもので、言わば小学生的表現であり、後者の文法的メタファーは、整合形に名詞化のような文法的操作や文体論的操作を加え、複雑化、抽象化した圧縮表現であり、大人の表現であり、科学や学術を支えている言葉であるとしている。安井(2008)(2012)の取り上げている文法的メタファーの具体的例である (5) をみてみよう。

(5) The driver's over-rapid downhill driving of the bus resulted in brake failure.

この名詞表現を含む文の意味は、(6) の2つの節から成る文が示すと考えられる。

ISSN 1884-7803

(6) The brake failure occurred because the driver drove the bus downhill over-rapidly.

有意味的学習上参考になる情報が安井(2012)に見つかる。英語において、文法的メタファーが急に増えているのが、17世紀末ごろであり、イギリスにおける、ニュートンに代表される急速な科学の発展期と時期を同じくしており、抽象的な概念を組み合わせられる言語能力の発展が科学の発展を促しているということである。

安井・安井(2022)では、「いま英語に何が起こっているか」として、次のような説明がある。英語には、情報の振り分け方に変化が起きており、動詞と副詞から名詞と形容詞へ変わっている。そうすることによって、より効果的な表現スタイルの構築が可能になり、look at ー closely という動詞と副詞ではなく、have a close look at のように、形容詞と名詞に情報が振り分けられ、圧縮形がもつ凝縮された密度の濃い英語表現が誕生することになる。固く引き締まった言語表現である文法的メタファーは、ほどいてもとの整合形にもどした方が理解が進むため、英語の学習指導において、「文法的メタファーをほどく作業」を中心的な課題としてより組織的に組み込むことを安井・安井(2022)は提案している。名詞表現としての圧縮形が好まれる理由としては、次のような3点の効果が挙げられている。

1、概念の具体化
　名詞は文よりも具体的であり、抽象的な意味も、実体があるように具象化される。
2、豊かな表現を作る(多彩な形容が可能)
　名詞を形容詞、形容詞句、形容詞節で修飾でき、豊かな表現を作り出せる。
3、リズムを整える
　英語は、唐突に終わる完全自動詞文を嫌うが、この嫌われるリズムから脱却できる。

本稿では、次の点も加えたい。
4、言葉の経済性
　引き締まった表現で簡潔に述べることができる。
5、代名詞で指示可能なため、繰り返しての言及が容易になる。
6、意味が膨らみ、趣をもたせられる。

世阿弥に「秘すれば花なり秘せずは花なるべからず」という言葉があるが、圧縮表現には、言葉の経済性以上に、潜在的意味の割り合いが増え、意味が膨らみ、趣をもたせられる利点がある。have a close look at のような「動詞＋形容詞＋名詞」という表現も、形容詞を入れ換えることで、「豊かな表現を作る(多彩な形容が可能)」という効果がある。文法的メタファーに働く文法的操作には、「名詞化」以外にも、佐々木(2006)によれば、「表現する過程の変更」がある。「過程」とは次のような動詞の表す内容であり、6点が挙げられている。

ISSN 1884-7803

動きを表す／物質過程　　心理を表す／心理過程　　状態を表す／関係過程
発言を表す／発言過程　　存在を表す／存在過程　　行動を表す／行動過程

「表現する過程の変更」について、佐々木(2006)が挙げている例をみてみよう。

「心理的過程から物質的過程への変更」であり、「名詞化」でもある。
(7) I greatly appreciate his hard work.(筆者)
(8) My great appreciation goes to his hard work.

「物質過程から心理的過程への変更」であり、「無生物主語構文」である。
(9) They arrived at the summit on the fifth day.
(10) The fifth day saw them at the summit.

名詞化は、動作をモノに見立てるが、無生物主語は、無生物を人間に見立てて、無生物＋動作を、人間＋行為という構造で表現している。無生物主語としての圧縮形が好まれる理由としては、名詞化と同様に、言葉の経済性の効果が挙げられる。無生物を、有生物のように他動詞文の主語にして単一の節とすることで、引き締まった表現として簡潔に述べることができる。

3.3 圧縮表現を「ほどく作業」

新井(2023)によれば、AI 技術の発展が著しく、機械翻訳が論文執筆レベルの相棒として活躍し、芸術の分野でも進化を見せている。このような技術革新により人間に求められるスキルは変容していて、労働市場への適応のため、人間はリスキリング(学び直し)が求められる。ところが、自学自習するスキルを身につけていない人が多い。自学自習するスキルとは、教科書を読み解く力である。小学5、6年で、読解力に大きな格差が生まれ、以降、格差は縮まらないと、読解力の必要性が述べられている。日本文でさえ読むことが危ぶまれており、英文では尚更である。日本文と違った英文の特徴に「圧縮表現」がある。(11) は行方(2014)にある英文であるが、下線部の名詞句、「火による彼の書類の破壊」、「20 年間の労働」が何を意味しているのか理解が必要とされる。前者は圧縮表現であり、「ほどく作業」が必要である。

(11) Just as <u>the destruction by fire of his papers</u> was complete, Newton opened the chamber door, and perceived that the <u>labours of twenty years</u> were reduced to a heap of ashes.
「ちょうど<u>書類が全部火で燃え</u>きってしまった時、ニュートンが部屋の戸を開けて、<u>20 年間の苦心の成果</u>が灰燼に帰したのを知った。」

ISSN 1884-7803

「形容詞＋名詞」という圧縮表現を、「動詞＋副詞」に戻す「ほどく作業」についてみてみよう。

1、「述語」が見つかる場合

「形容詞の元の副詞」とつながる「述語」が見つかる場合、述語は明示的な場合だけでなく、暗示的な場合もあり得る。(13)(15)では、百科事典的知識を通して、言語表現として顕在化してはいない「起きる」、「飲む」という行為につながっている。

(12) early riser　　rise early
(13) early bird　　get up early
(14) occasional visits　　visit occasionally
(15) occasional coffee　　drink coffee occasionally

2、「述語」が見つかり難い場合

「形容詞の元の副詞」とつながる述語が(外国語としての英語学習者に)見つかり難い場合の例として、(16)の表現がある。述語が見つかり難いのは、物理的動きではなく、心理的動きが関わっているためと考えられる。

(16) occasional pine trees(小学館プログレッシブ英和辞典)

この表現をほどくために、主体化という認知プロセスについてみてみよう。

3.4 主体化

Langacker(2000)には「主体化(subjectification)」という現象が述べられている。「主体化」とは、言語表現の前の捉え方の段階において、認識される側である「客体(object)」と、認識する側である「主体(subject)」の関係において、「客体」の動きが存在せず(消失して)、「主体」の動き、あるいは、「心的走査」のみが存在する(残存する)ことである。「心的走査(mental scanning)」とは、客体の動きや静的な形状を捉える際に、「主体」がその客体を心的に辿ることである。「主体化」では、人間の認知の営みが姿を見せることになる。「主体化」の例として、本稿では、籾山(2010)を参考にして、5つのケースに分けてみることにする。いずれも「客体」の物理的動きが見られず、見られるのは、「主体」の心の動きである「主観的移動(subjective motion)」か、「主体」の物理的動きである。(E では客体の動きがあるが、言語表現の意味する動きとは別の動きである。)

ISSN 1884-7803

A、客体の動きが存在せず、静的な形状を捉える「心的走査」のみが存在する。
(17) この道は、その地点から急激に下っている。

B、客体の動きが存在せず、静的な形状を、あたかも動きが存在すると想定して捉える。
(18) 顔にソバカスが散っている。(客体の個々のソバカスは動かない)

C、客体の動きが存在せず、主体の動きが存在するが、逆転して客体の動きとして捉える。
(19) だんだん山が迫って来た。

D、複数の客体には動きが存在しないが、その客体間の違いを、単一の客体の動き・変化として捉える。
(20) 学生の学力が年々低下している。(客体の毎年の学生の学力は変化しない)

E、客体の動きが存在するが、その客体の異なった動き・変化として捉える。
(21) 船の姿がだんだん大きくなってきた。(客体の船は動いているが、大きさの変化はない)

A と B は分けているが、言語表現において、心的走査と、客体の想定される動きは表裏の面があり、判別が明確ではないこともある。 例えば、(22) は、心的走査、(23) は客体の想定される動きと考えられるが、(24) は、どちらとも考えられる。とうもろこし畑の上を、心的に辿っていると捉えられるし(心的走査)、とうもろこし畑をカーペットのように捉えて、それが広がる様子(客体の想定される動き)をイメージすることもできる。

(22) そのビルは、空に向かって伸びている。
(23) 駅を中心にして、東西に家々が散らばっている。
(24) 眼下に、とうもろこし畑が広がっている。

3.5 圧縮表現と主体化

主体化を踏まえて、occasional pine trees という表現について考えてみよう。通常の圧縮表現と違う点は、主体化が関わっていて、「形容詞の元の副詞」とつながる述語が(外国語としての英語学習者に)見つかり難い点である。主体化については、前項でみた A と C のケースが該当していると考えられる。A、客体の動きが存在せず、静的な形状を捉える「心的走査」のみが存在する。C、客体の動きが存在せず、主体の動きが存在するが、逆転して客体の動きとして捉える。

1、表現対象(空間的間隔を開けて存在する複数の対象)
松の木が、ある間隔を置いて離れて植えられている。

ISSN 1884-7803

2、捉え方（主体化）（時間的間隔を開けて動く客体として）

A のケース

立ち止まって眺める主体にとって、松の木々が、時々（occasionally）、入れ替わって、視野に現れてきて捉えられる。

C のケース

乗り物に乗る等移動する主体にとって、松の木々が、時々（occasionally）、入れ替わって、近づいては遠のいていくように捉えられる。

主体化 A、C のケースによって捉えられる（25）のような表現から、圧縮表現 occasional pine trees が生じているものと考えられる。

(25) Pine trees appear occasionally in sight one by one.

「形容詞の元の副詞」とつながる述語は appear のような「現出する」という意味の動詞である。occasional pine trees において、見え隠れしている、時間的概念と空間的概念、つまり、時間的な間隔における「動的な物」という意味と、空間的な間隔における「静的な物」という意味が併存しているのは、主体化による捉え方（時間的間隔を置いて視野に入ってくる物）と表現対象（空間的間隔に存在する物）の併存の故である。occasional の語義を**図1**のように示してみよう。1 は原義であり、2 が拡張した新たな意味であり、3 は、両者を統率する抽象的意味である。

occasional の意味

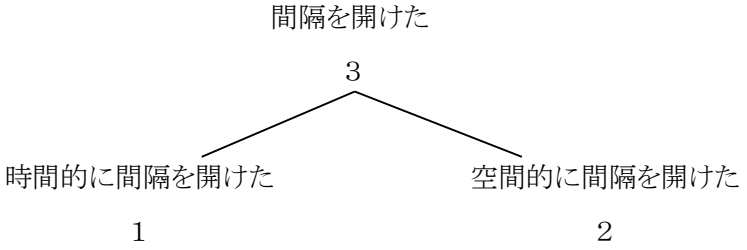

図1

1の原義が拡張したのが2の意味であるが、転義ではない、つまり、1の意味が消失して、2の意味が生じているのではない。そして、2の意味で使われる場合、3の意味、1の意味が背後に存在していて、2の意味だけが独立して存在しているわけではない。この点は、以降でみる（26)-(29）の日本語の例からも分かる通り、主体化のプロセスが裏に見え隠れしており、空間的概念と時間的概念が併存していると言える。

ISSN 1884-7803

「形容詞の元の副詞」とつながる述語が、外国語としての英語学習者に見つかり難く、違和感を感じる occasional pine trees のような例も、英語母語話者には違和感なく感じられる通常の表現と思われる。それは、日本語にも同様な表現が見られ、日本語母語話者には自然な表現で、特別に難解な表現ではないことからも納得できる。(26)-(29) のような日本語の例において、時間的間隔を表す形容詞と空間的間隔を表す表現対象が矛盾なく結びつき違和感を感じないのは、潜んでいる主体化を感じ取っているためである。英語母語話者にとっても同様の心理が働き、occasional pine trees を違和感なく捉えていると思われる。

(26) 明らかに注意力不足の頻繁な誤字脱字や、内容が真逆になってしまうような誤用は確かに気を付けなければなりませんが https://kawana-gyosei.com/日本語教育/1770/

(27) 度々の赤信号にポジティブな意味付け(こじつけ)できた自分に何だか「いいぞ！」と言ってあげたくなりました。 https://note.com/ikidukai/n/nbe430d87b89e

(28) かつてこの頻繁な停車駅を利用して確か直江津から敦賀までという利用をしたことがあります。 https://kmy050367-alfa-rail.blog.jp/archives/6625225.html

(29) 残暑でバテバテも花ときおりの絶景で癒やされた至仏山 https://www.yamareco.com/modules/yamareco/detail-5840674.html

「英語には変わった表現があり、時間的間隔を表す形容詞が空間的間隔を表す表現対象と結びついている」と感じていた学生も、(26)-(29) のような日本語の例文を見て、occasional pine trees のような英語表現が特別な表現ではなく、日常的にありふれた表現であると納得するものである。また、(30) のように言語文脈があることで、外国語としての英語学習者にとっても、文脈の助けにより理解は容易になる。

(30) There were occasional pine trees on the roadside.

「ほどく作業」における occasional coffee と occasional pine-trees の違いは、前者では、元の副詞 occasionally とつながる、客体に関係する「物理的動き」(drink)が見つかるが、後者では、見つかるのは、認識者の見え方(主体化)における客体の「仮想の動き」(appear)ということである。そのため、前者にはなく、後者にあるのが、時間的な間隔における「動的な物」という意味と、空間的な間隔における「静的な物」という意味の併存である。これは「主体化」に起因している。

ISSN 1884-7803

4. 英語聴解力習得と英文法の有意味的学習

文法的メタファーや名詞表現は、ナチュラル・スピードの英語聴解力習得に向けた洋画や海外TVドラマの視聴においても散見される。(31) は米国の TV ドラマ WEST WING での発話である。

(31) It won't hit us.
But if it does.
Then, likelihood is, it hits an ocean, starts a tsunami, and, you know, surfs up … in Illinois.

「日常会話」と称して、カタコト英語でのやりとりに終始するのは問題である。なぜなら英語圏で日常会話をするというのは、映画の1シーンに登場人物の1人として放り込まれるようなものだからである。外国語としての英語学習者にとって、日常会話は難度が高く、まずは、相手の言うことが理解できるためにナチュラル・スピードの英語の聴解力を身につけることが必要である。映画について、興味深い部分のみを切り取って、数分程度の興味深いハイライトとして取り上げて授業で利用してきたが、学生にはよい刺激となったように思う。映像を見ながらの聴き取りは、興味深く、学生は意欲的に取り組めていた。次は筆者の授業で過去に実際に利用した教材例である。

あらすじ
反英世相が高まるアイルランドの寒村。教師チャールズは、ロージーの激しい愛情に応じ、結婚式を挙げるが、結婚初日から、2人はうまく行かず衝突する。彼女の前に、英軍守備隊の指揮官が赴任し、2人は愛し合うことになり、不倫関係が村人に知れ渡る。独立運動の戦士たちは、武器の輸送を考えるが、守備隊が立ちはだかり失敗する。村人たちはロージーが密告したと考え、指揮官とロージーに憎悪を向ける。指揮官は自殺する。チャールズの彼女への愛は変わらなかったが、2人は別れる決心をして、仲の良い夫婦を装って村を去ることにする。

最後のバスを待つ場面について、学生に次の質問をした。

村を去るために、2人がバスを待つ場面です。見送る神父はロージーに餞別を渡し、バスに乗る教師チャールズに、餞別の言葉を述べます。神父の doubt とはどういうことを指していますか？

(32)
C: Thanks. Father. Thanks for a great many things.
F: Charles? I think you have it in your mind that you and Rosy ought to part.
C: ….
F: Yes, I thought as much. Well, maybe you're right, maybe you ought, but, I doubt it.
And that's my parting gift to you. That doubt. God bless. ……
I don't know. I don't know at all.

ISSN 1884-7803

神父は、2人が別れる考えであることを見抜き、思い止まらせて、「やり直してみたらどうか」と助言をしている。その後、「うまく行くかどうか、分からない」と呟いている。映画の内容とは離れるが、日頃、“doubt”の用法を間違える学生が多いために行った解説について触れておきたい。日本語の「疑う」に、普段気づかない2義があるという事実が、間違いの大きな要因である。日本語の「疑う」の意味を明らかにしてみると、次の A、B の2部分から成る（日本語母語話者はこのことについて普段意識をしていない）。

A「ある陳述が真実ではない、と思う。」B「その結果別の陳述が真実である、と思う。」

上記 A の意味は、「～であることを疑う、～を疑う」という言語環境で、B の意味は「～であると疑う、という疑い」というような環境で表れている。この日本語の「疑う」の意味を考えながら、“doubt” のある英語の文の意味を考えてみよう。

(33) I doubt that he is guilty. の日本語での対応表現

○ 1.彼が有罪であることを疑う（彼は無罪であると思う）

× 2.彼が有罪であると疑う（= I suspect that he is guilty.）

理解の間違いによって、次の文のような意味の取り違えが生じる。

(34) I have no doubt that he is guilty.

× 3.彼が有罪であるという疑いを持たない（彼は無罪であると思う）（= I don’t suspect that he is guilty.）

なぜならば、(33) の否定文が (34) であるから、1 の訳が否定になり、4 になるはずである。

○ 4.[彼が有罪であることを疑う]ことはない（彼は有罪であると思う）

日本語で、明示的に「疑う」の2義を分けて意識していないことが、「母語フィルター」となり、英語の doubt と suspect の使い分けの誤りを招いていると言える。母語フィルター透過装置となる明示的学習、英文法の有意味的学習が有効となる所以である。

5. おわりに

文法・読解を学んだ上で、英語に多く触れる努力をしなくては、英語の運用能力として活用できる知識とはならない。白井(2008)によれば、「どんどん流れてくる音を意味に結びつけるというプロセ

スが、言語習得の本質なのです。意味を音声で聞いて理解するプロセスなしに言語習得は起こらないというのが、第二言語習得研究の現在までの結論です」とのことである。ただし、スロー・スピードのカタコト英語に触れるばかりでは、英語圏の日常会話、映画、TV ドラマのナチュラル・スピードの英語を聴き取ることはできない。本稿では、そのナチュラル・スピードの英語聴解力に向けて「足場」となる文法学習に焦点を当て、学習英文法の精緻化についてみた。英語を使えることが「暗黙知」の習得とすれば、その基礎段階である文法の明示的学習は「マニュアル」の学習と言え、精緻化とは「マニュアル」の改訂である。本項では、「圧縮表現」を中心にして、高校までの学習英文法知識の精緻化についてみてみた。文法的メタファーに「無生物主語構文（無生物が主語となった他動詞文）」があるが、なぜ、日本語では、このような他動詞文が英語のように広く使われないのであろうか。英語では、語順の固定度が高いため、そして SVO の文を好むため、先頭の主語に、強調したい要素を持ち込む方向に向かったが、日本語には、そのような強い動機が欠けた、と言うことができる。また、安井（2012）の解説を敷衍すれば、科学の発展と共に、自然を征服するという人間の「万能感」という傲慢さの反面、宇宙や自然の偉大さを感じ、人間の「無力感」という謙虚さも育ったのではないか。宇宙の中での人間能力の位置が相対的に低下し、「高い認知的顕著性」の置かれる主語が、人間から宇宙・自然に移行するパラダイム転換が起きたとも考えられる。そのような科学者の考え方が英語の言葉遣いに影響を与えてこのような他動詞文が生まれたと推測できる。

英語の名詞表現を中心とする圧縮表現は、日本人学習者にとっては、習得上の難所の1つであり、「母語フィルター透過装置」として明示的文法学習の対象となる。安井（2012）によれば、この表現が増えているのが、急速な科学の発展と時期を同じくしており、情報の振り分け方の変化・抽象的概念の組み合わせによる言語能力の発展という歴史的背景がある。また、引き締まった簡潔な表現、形容詞修飾による豊かな表現等、使用する上の意義がある。更には、表現を理解するための「ほどく作業」等の情報も有用である。「形容詞の元の副詞」とつながる「述語」が見つかり易い場合だけでなく、見つかり難い場合もあり、物理的動きではなく、心理的動きが関わることについてもみた。「主体化」を学生に説明する始めには、「太陽は東から上り、西に沈む」を提示している。地球が自転しており、太陽が移動するわけではないことは自明のことであるものの、日常の言語表現では、見えるまま、感じるままを反映させている。客観的事実の認識とは異なった主観的な受け止めが「主体化」である。本稿でみてきた知見を通した有意味的学習は、学生が英文法を習得する上で有用となろう。最後に、筆者の英文法の説明は改良を重ねてきたが、文法やことばのしくみ等の授業での学生の意見・反応、学生とのやり取りに負うところも多いことを付しておきたい。

謝辞

査読委員の先生には、貴重なご意見を賜りました。また、編集委員の皆様には、お世話になりました。感謝申し上げます。尚、当然のことながら、本稿についての責任はすべて筆者にあります。

ISSN 1884-7803

参考文献

新井紀子(2023)「AIに負けない読解力を」『文芸春秋』第101巻第2号.文芸春秋.

和泉伸一(2007)「流行の習得理論(指導法)と授業の変化」『英語教育』10月号, 20-21.大修館書店.

大庭コテイさち子(2018)『ロジカルに伝える技術　コミュニケーションの必須ルール「エッセイ・トライアングル」を装備しよう』NTT出版.

佐々木真(2006)「英語の文法的比喩とその英語教育への応用について」『愛知学院大学短期大学部紀要　第14号』

白井恭弘(2008)『外国語学習の科学 ― 第二言語習得論とは何か ― 』岩波書店.

白井恭弘(2012)『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店.

為末大・今井むつみ(2023)『ことば、身体、学び 「できるようになる」とはどういうことか』扶桑社.

半藤一利・江坂彰(2006)『日本人はなぜ同じ失敗を繰り返すのか　撤退戦の研究』光文社.

三森ゆりか(2013)『大学生・社会人のための言語技術トレーニング』大修館書店.

籾山洋介(2010)『認知言語学入門』研究社.

安井稔(2008)『英語学の見える風景』開拓社.

安井稔(2012)「学習英文法への期待」大津由紀雄(編著))『学習英文法を見直したい』研究社.

安井稔・安井泉(2022)『英文法総覧　大改訂新版』開拓社.

行方昭夫(2014)『英会話不要論』文芸春秋.

山本幸一(2022)「ナチュラル・スピードの英語聴解力の習得に向けて ―文法・読解から直読直解、そして直聴直解へ」― *Language & Literature* (Japan) 第31号.

行方昭夫(2018)『実践　英語のセンスを磨く』岩波書店.

Halliday, M.A.K.(1985) *An Introduction to Functional Grammar*, Edward Arnold.

Krashen, S.D.(1982) *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Pergamon.

Langacker, R.W.(2000) *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.